

## 「Social Distance ≠ Physical Distance」

### 使徒言行録 2 章 4 3 ～ 4 5 節

学生キリスト教友愛会 (SCF) 主事・本学講師 野田 沢

今、日本では自死（自殺）が増えています。有名人だけでなく、統計でも例年に比して多くなっている、寂しく厳しい現実があります。

このことからわかるように、私たちは自覚的・無自覚的かは関係なく、皆が少なからず傷ついています。みんな傷んでいる。どこか余裕を失っています。

皆さんはどうですか？「たしかに少し感じるな。」「いや、別に。」…それぞれだと思えますが、現在は社会的・世界的に痛みの中にあり、心に余裕のない状況にあるようです。

本日の聖書の箇所は、新約聖書の使徒言行録。イエス・キリストの弟子たち（使徒）が、言ったり行ったことの記録のひとつ場面です。約 2000 年前、この世界に最初のキリスト教の教会が誕生して、そのコミュニティが何を大切にしていたのか？が描かれています。

そこには、「すべてのものを共有にしていた」とあります。キリスト教会が歴史的に大切にしてきたことは、「分かち合う（自分を割いて分かち）」ということ。

当時、貧しい人も多く、衣食住、また金銭を皆で分かち合ったと。2つ持っている人は1つも持たない人に、多く持つ人は少ししか持たない人に、自分自身の想いと祈りと意志によって割いて分かち合う。奪い合うのではなく分かち合うコミュニティの姿が描かれています。

それだけではありません。このキリスト教会コミュニティの分かち合っていたものは金銭や食べ物だけではなく、目に見えないもの、「人々の想い」をも分かち合っていました。

キリスト教でいう「すべてのもの」とは、目に見える「物」だけでなく、私たちの心の「想い」をも含んでいます。

貧しさの中で生きづらい。明日が、将来が不安だ。孤独で寂しい。心が傷ついて痛い。…驚くことに、誰しものが持つそのような「ネガティブな想い」も含めて、皆が互いに分かち合っていたのです。

新型コロナウイルスの蔓延によって、他者との距離を取ることを推奨されて長くが過ぎました。フィジカル（物理的）な距離だけでなく、私たちは心や関係性の距離まで広げてしまっていないでしょうか。

この社会は、心に触れてもらえない、認めてもらえない孤独、存在を全肯定してもらえない寂しさ、明日や将来が見えない不安で溢れています。

そのような「皆が寂しさと痛みの中にある社会（ソーシャル）」に対して、また他者の痛みに対して、私たちは距離を縮め、触れ、分かち合い、受け入れ合ってゆくことはできないでしょうか。

聖学院大学の建学の精神であるキリスト教が大切にしてきた「痛みも悲しみも不安も、そのすべてを共に分かち合って生きる」ことを通して、私たちも私たちの社会もあるべき姿へと導かれたいと願います。

2020年10月23日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「苦難を乗り越える」